



天



7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8

仁口門
卷

根本
氏藏

其園答要卷之二目錄

罔氏
齋庭

皆川淇園著

讀畫

圖說

舊例曰格の本の事

學向を何の事と致申記
旧例曰格の本の事

俗智俗才と有用の才とある事

學文致させつゝの事

六

詩經の事

七

禮の事

八

樂の事

九

書經の事

十

春秋の事

十一

周易の事

十二

論語の事

十三

孟子の事

十四

荀子の事

十五

老莊の書の事

十六

禪學の事

一 三 五 七 九 土 十 二 三 五

佛家の說の事

- 十七 心學家の事
十九 诗化齋古事
廿一 学文用ひうの事
廿三 學使の設け方の事
廿五 目錄終
- 十八 文章齋古の事
二十 教もハ難の事
廿二 士と試る事
廿四 教と設けハ心得事

淇園答要卷之上

皆川淇園著

一 學文とヤ事ナ用のねの私ト思ひ何の為ト學文ヲ
彼ニ事入りテと其次得トヤを以極ト古後代家後
成程一通りの料薈ト魯學文を入用シテ私ト見
得ナリおほ度ヒ能ク學文を第一人たる道成和
ち事是よりさきは生第アヤヒ云用トヒラ雅アヒ若
政事の為ト云用ラモトヒラ事より孔孟の門人
子張の後ト有民人焉有社稷嗚何必讀書然後為
学トヒ不即此弱モ同一トヨヒ子張の主ハ人ト用立

者より仕立んとするゝ政ともも役立く入をく朝メ
見せし得たる文のある小書いのうと、お遠とおと現あらわる
詔うち民人のえ扱のり有社稷の守りのえ扱事向
りえ波なみ小付こづけく自然より甚ひなま扱あつひ功者にくへき
變かわふるよ何故なぜ孔子の教きょう書しょ波なみ傳つたてはは學がくと
名付なまづけてはは是ぜととの是ぜ孔くのんの波なみ書しょよよ是ぜ故
恩おん支し僕ぼく者しゃと云いはは是ぜ波なみ書しょの是ぜ是ぜ故
て後ご小字こじと名付なまづけるはは別べつ像ぞうよよす世よ小僕ぼく者しゃと
えゑある所ところて商しょう業ぎょうの兵ひょう税ぜい利りにととひて何なに變かわふる商しょう業ぎょうと
產うぶすうの如ごといある事ことよよてての志し有あせせとと思おもて

學がくハするそとこそこハ學文がくぶんとすきハ民人みんじんと活はむ
ハめ冊くわくと活はめ引ひきと定さだりたるははとと社稷しゃきと守まる事
めばよ定さだきたりたる道みちとするととくよすの全許ぜんきよの如
其人の猶ゆう中なか小傳理立こうりんりだつ者しゃここまくまく傳理立こうりんりだつ
さぬ力ぢから内うち小峰こみねをを魏魏廻まわの押方おほがた斗とうとと是いてて何なに有あせせとと生うむ
もあの方かたのれ立たててはは生うむの而ひに害いたずらとと生うむ
る事こと放はなよよももとと思おもてて學文がくぶんととははする事こととと是いてて有あせせとと思おもてて學文がくぶんの入用いりようの事ことお除ぬぐははま
ないすすは産うぶは

二 前書まへしょよりををは學文がくぶん入用いりようの事ことお除ぬぐははま
まへしょ

表すと等夷端の事、清先代よりの旧例曰接にて
何よりもお済あれば、内家中の士より学文を令
官教諭の思ひに舟は不然又心得邊も有るが
云を意やとは極き終下所は是ハ以の御方あるが
と詔書に先づて表ふ事より旧例曰接と申す
あやい在知やとは得を仰とも従古の例接
して天朝の旧例又至徳倉或ハ足利の作法不
ト本ほきく起りて、あすて、の有之は右者

天朝以下の例接、大抵皆まことに本土の制す本ほ
き、而上の制接皆まことに、古聖人の礼制すを付たる

物ある處へと詔書に故、古聖人の礼制すを付さ
ニアリて、何よりも仰可也部をあふて度は左者
やく特量仕はるゝは度は君主がすもつて其事に
記する大本へ立て、アリモち大通と食忌ふ政、旧例
曰接を立ち、用小立ナ宣教はるゝ是れ禮清玉奉^警、德
役人中次才ナ宣教はるゝ人のことおあり、内侍下御領
令の風俗、清才ナ宣教はるゝ人のことおあり、内侍下御領
心得を取はるゝ事、^警ととりてナヒリ、脾腎の虚
損よりうりかけたる病人うち是を一病うりけとはして
養生もせず薬も飲じまると思ふ日が多殊

よ鼻の先ある事の見えぬとやうに見る可
有は度は言ふべからくとは考へ承て承とあは
ゆる度は

三回例曰核みてたのも喪葬の事も之役人ホもお
無ふは用ふ立ひ者も出来やうも何の事かと
云ふ是後狀承ぬ人情の慾とヤ者自身の事參
たのこゑ發す、ふと喪ふる事とのと思
ふ核ふ由度は是外の宣安玉と由りを
つ由後狀承ぬ得た喪葬葬の事明ふた初可ヤハ
は役人奉お無ふ用ふ立ひ核ふ私恩石も皆是俗

智俗考にて社稷の大半をふと乍ら勿論民人
の取扱も皆この業因より其上若無く有死人の乞
そ人と指付やひ事を思きぬをサ一しても
記りぬれ方何きも功頤が斜らするの時多是高
人のめく氏と刑くは主の府席と充と努テ某
用のこ黙く擁つて抱と拂り媚諂モジやすの功者
得とも孔子も不謂侮者とヤ者より早意寒素
厥アキのよ由度は或の云々今之法王の用ふ立
と称する士ハ利に小見つて其実、何の用ふも

四

立あやとや勞一幸多々と行きも其用トモも立者と用立ヒ者と云思ひはも是志を為難してゆ歎ヒの事と由心識シテ願ハシメ立ヒてめくよ公用の人も有用トモアリヤシ歎所當又渴と由考可歎ヒ

俗智俗才トモも學文と致レヒり用立ヒ者トモ成りテヤシと云尋シテ候誠シテル所は凡智惠ミツヒ才トモ教タヒ何事トモも學ヒ得ム其學ヒ付スて育ムねホ亦ハ無ム長シすク事トモも學熟シテシム相シマ成ルり方トモ方に暢ヒヤひタ物トモ由種シテ小兒コノのトモものトモの時トモいろはモひ書シテキナアリ志アリ後タリ無ム何トモ小

ても書シけルあリ廻ハシマく苟シテ免ミテすクいリと心カけルきモも義ミ家カミを主シメて令シメと惜シムまニ志シムの立ヒ者ト成ルり私のトモハナリと誂シメりたム者トモ天タケシと異シて之トモより小載武念武念ミきシ者トモと成ルりシテのトモ若シるクの是トモ非シテ小惑シテいハシマの因シテ失シテ危シムと疑シテひたム者トモ道トシテ成ルる根ハシマとさシテる事トモとシテる事トモの行シテ要シテ知シテ知シテ滅シテ害シテくシテて眼シテみのトモ拂シテ記シテ失シテひたム者トモ物トモの大勢トモと減シテりて財トモの可シ否シと却シテる事トモと待シテ危シム小勝シテる事トモの行シテをシテ逢シテても皆シテと引シテ一シテ治シテ先シテてシテを理シテの立ヒに處シテ方トモを取シテる事トモとある者トモ小

少羅は草元の所へ大人の道と通達して疑ひ立
ての小さくを終へ加板の所元へ替りの本を
かく記元のと可也思ひ

立

學文の波う勢うのめ何故お波はとの教が史學
と波はる古今の沿礼より明くこのふお成りは故人
用立やあるありつややとおほれ候波は琳文候
波は用立とやよ様の差別の有えい詩を作り
ひる用立事も有く行すも物すの放まつと竟
つ居やひる用も立ひ又有職林のす景を居やひて
用立^立も有えり若然其教のす景を職の者ひ

お作せはるは學でせひ加ひゆもお説うやひは家中
の士行きも加板の用ひ立やひ板よ波う勢はと用
は事す由羅は家中の士の學文と詩文も入不
ナシ由ども是等文字と云板は力と骨やは為に
筆意も有くはり學を努力しても宣あひよう何
見ゆも古書と讀て文との通りでひよ入ひ板よ相
成りて筆意新あとみてゆり是くも中よ人
皆よ他所の略と取ひ板よ筆意あ心よう有え
て文字の力と骨ひ事^事を寺勢はり度に走りよ晚
学までたれを力と用ひうしくひよおひて薄

私そぞりよてもあ昔はう日行方よも先ほ人の道と
やあくしり古聖賢の教と設らきひ大旨善よ考
悟忠信仁義の徳名と識り徳名も流衍の法民の
事事の著お一著いひ跡跡士士の名の君子の徳と
学うや汎と知り得詰三百篇の教よ説ひ吉輩
賓嘉の立立礼を大暗大暗お窓窓メアヤアヤしてハお叶加板の不
吟味お海海含含有有えひり始て士の用立用立ヤ用立キキ可
ナハ古今の法礼よシテうよシテ種種にす是是に実事
う古の因因得得と助助キキ化授化授よ取取リは左左大大用立用立ヤ
りぬた君史学をうりよてハ事事の取取利純利純の政
三は度度ニ

よ付て元る而已ある故よ主學主學の心心仰利
害得失の心心と用用板板よ本本心心鄙鄙く
詐詐術術と貴貴む板板よ歛歛りつやつやは史学史学ととををも小
用立用立は板板よ立立思思ひはは是是亦亦仰得遠得遠ととををよ

而書而書小小ををは詩三百篇詩三百篇とと有有消消ふとと者者か河
板板ののうりははふう才才をを有有取取り詩經詩經の教教のの漢儒
以以來來小序小序とと仰仰くととみれみれて後後すすよ歛歛板
孔門孔門の教教のの無無ひひ孔孔つつて學學文文ととや
ハ詩經詩經とと有有はは友友通語通語も興興於於詩詩之之於於礼

と教へておありとては、
何事ももうすま、是がト近字性あつぎで
のとと又そ次事もゆて、
名付すにねらひて、是がト書鏡すも詩言をと
志と多分のゆく所と別と云ふ字とて行ひうそ
もせよとは一ついふ思ひてせようしてほき
て又そ次のゆりふうつりけとあとさよ詩の事
小おゆりふう右の志とえよまのまわらるて、
言志と言ひたるめうり、是天の道無一陰一陽と
よりてお走きて行ひうそと道をまち事

さて始の緒と絶えて、
は何もは天の道のねうるねうるうね
あるねとて史婦の情よし、
道徳の事トより、トは道徳の情と教へま
もりげふと、易ふ無天下、天下同歸殊途
而百慮ト、トも、中庸ト居る之道送端、ト
史婦及甚至也察、ト辛天地ト、トり、即ち周南閑
雎之篇の窮寇淑女君子好逑ト、トるう送端のねうり
史婦の情の或をまると絶え、トて怨を或ハ送端
き事と教へまるとて甚道徳のやうおもて民

と説導して道德を全じる事無うるお幾
の道と以て家人の常朋友の道又無田獵祭祀
農業るとふ小せて教たる無小雅うり大雅の
全要と極めて大人の間も通し及して喻示
いたるも頑公頤すり其事無根より度をもとと
もほある所無きとモ極て孝悌忠信仁義乃
純乎政もる極よりみてあへら一たらねある左小
時と学ひて熟すをハ其人情の度の極するも
とは曰處して無事安道ナシマツシキト立へらむくそも不の
即ち人道の義の立法不なり放ふ孔子の御詞よ

も詩可以言可以群可以忍述之可以事父遠遠之可以
事君と云はば以叔右人道の義の立法定やりた
るよりの法規と云ふもの左詩三百篇ミツサンバンと暗诵
あらる士を政事の難扱すと用ひた伎者を勸
を啓すと文答も作略出来ば若の事ナシタチ右
の詩の學カクいから思案あきらか其意見えをも左小
誦詩三百援改援之以政不達使四方不能專對難多亦嘆
以為と云ひ經より詩の學の方をめ取ひして教根
よき伝付ひり諸士用立ひ者出来可やひもあひ
小立産ヤクあうし已前ヤハシたるやく詩經の流か

と漢儒以本小序とヤねまをたしまて説此应用
ム立あやひ宋儒の詩經の説小序と云ぬとヤ
ミテ是亦小序の説小彷彿たる説うへて左小
是も用立あやひ左小抄詩經新解十九卷次著
主く又右の方の辛辛ことありて先の詩經二
百訓闡とナ假名本の書と板刻改々セキヤヒ
古遺本と當店考文成りて詩經の教たる不暗お已
ウシ一のやひ

七 立半禮とヤ事無め何の事はシヤ工ひ板と佐波
ル以ヒ總別流礼とヤ志無凡物の内外大小上下要

傍遠近親疎の等穀と各其節より中りお和モ
ム板るトモリ毛板無告礼と称一に事より瓦封
一にて各其分よりお齒の板ト何からく無勿論の
事トして毛人トても其分より齒の板として有モ
つ毛人ト称する事アソブリ活世の俗風無上下
の次毛人ト称す事アソブリ活世の俗風無上下
それと毛人ヒて甚次才の等差と混レヒ板ト事
ヒ事無れとヤキモヒ一つ志より是無事意の不
士と農とをさくとく農の鄉飲酒の礼と傳セ
ある毛人農ハ自から高より卑き板なる者とナ

高い財寶と自由とある反対の士も是を羨んで
心う高く人とより人と次第よく多く教える事と
ある事とほ思ひは故古の礼の内か大小
上下考究を追視跡の等穀の向うらひの事、
時小あり見半いも有えり身身を取りて作略も
う有え而所謂時の中うちあうりとは礼を押
かくしてハ物事より差支ふ所何處小た冠礼皆
礼一章三
士相見礼御飯酒御射礼祭礼妻禮の事小
ち難きくかあふを扱ふ不付て礼制と改け
て其礼制の事と學び吟味として之頃と以て

今この日用の事よりさめて用むる極よあくらむわゆる
左小論語すも有ふの語ふ礼之用と云つて礼とは
用ると云ふ事にて即れの事と以て今この日用小
も先て用むる事と云ふ事儀禮とは礼の
經とする事孔子の諸門人の為す先王の礼
と作略とがへらき當時の用立極よ教へ移ひたる
ねと見得れば礼記ふきふ不い左の用むる付て
の作略と記したる事より先儀禮ありての後
の作略と作略を以て用むるを行つて用む
うする事有と可思ひ

念

樂と云ふお舞詩と寄ひて其変成琴に必ず有る
て律と正しくもと和する極よして正しくて
よりて君子朝夕は樂變の和を以て其氣血の正
安ふと考もにしてあらもねふ和する事の出来
極ま心うけや為の事をよするねと云はる所古
樂の節奏等極志若よりから吟味致ひ
有えり得た是ハ志省略か云ひ

九 書經と書多何の用立はいとは易く作成し
はん人の事と難扱いよ義と利との二つより云々^{云々}
云々はる利とすと民役せん義と云々は民

役也るもんと是ハ謀小小人の内よても使害と云
ひよと云後を取れり得ち其後お分り可やくは使害
争ひては慈よきと云ひして義め似くる所とする
あらうるう義よきゝありしてそへ民へせむを怪ひ
無する者ありよしてまの義うきは民のを
役ゆあらうるの計よ小智うる者ハ其義のを
不と知る事能よばた利のて知りて事と毛
根ふゑよ亂心役トうくして其事業浮世
の法と云す尾うくする事と云々と書經の

内ノに載せたる所も非皆聖賢の事業ヨリにて
きて大義と仰ハシマツルせし事アリ。海世の法則と
すつゝ書うりと可思石シテ。

十 春林の書の事アリ。審スル後ハシマツル成スル在ス。春秋經
世先王の志と有スいゆきモ王朝の威權裏
くほ齊桓晋文公晋のたゞひの霸者シテ。諸侯ノ同盟シテ
と卒シテ。王ノ朝貢ヲヤハシム。ひよ諸侯ノ同盟シテ
玉ノとシテ合ハシマツルて其ノ貨物吳吳の事アリ。と並ヒテ。患難ノ事アリ。
而ハシマツルて血ノお助シ。事アリ。扶ハシマツルてをシテ。好惡ノ同シ。事アリ。
と要シと習ハシマツルる所アリ。今ノ世ノ次ニ卒シテの中间ノ有ス。

如くより其ノ同盟シテの礼臣ノ誠アリ。豈シテ立シテし
訥シテ。事アリ。とある所アリ。孔子作春秋而ハシマツル礼臣ノ誠アリ。
懼シテ。とある所アリ。のうり。母モ我ガ名時ノ中ニ詳シ。
載シテたる所ノ省略シテ。

十一 周易の書の事アリ。何ノ爲シ。設けたる所ノにて。以ハシマツルて
と云フ。爲シ。之ノ代ハシマツル先シ儒ノ絶說ノ内ノ。そシテ古事よ
り其ノ義アリ。と語シ。仰ハシマツル事アリ。周易トシテ其ノ變化。
參互シテ。產シテ。易シテ。易シテ。鑒鑿辞。周易トシテ。支易シテ。何ノ爲シ。物ノ。
成シ。勢シテ。冒シテ。天下ノ之ノ道アリ。如シテ新シ已シ者アリ。也シテ。と有スい。故シテ。易シテ。
參互シテ。產シテ。物ノ。成シ。勢シテ。力ノ。とシテ事アリ。易シテの入用ノの要シテ。

以軍物と云ふハ名の因よりかくまとなる物と定まつたも
の義よりて繁縝辭語より圓而當名と有之は名と云
ふ者儀礼より百名以上と云ふの名よりて文字の事
より文字の名凡一箇斗も有之ひて各其儀と會
ひ事不同ふるをよすよすと称して並ねともナシ
物是名の本ほう生れたり不無人言ふ生れた
る處ふ言ふもあと称して易の家人の朴魯徳重
君子以言有物而行有恒とア事とも相見テアレ叔古人寧何
凡ふ言ふ有物と貴ひく又必易と作マスく以く
岩のぬと渦んと欲するより是事皆何の用立

事云との由尋よりり是無人道の要無善く
古と徳とアふ互に不古人の情とア拘無獨無辭
との出でたるまでよりて辭ハ又衆名の合へる所
即ち亂物の其義と舍へ廢くる者あるうを小
名物と害ふされ、古人の情り的ひよ見る事とは
るきやひ的ひよ見下されば其義との一て疑ひす
其道をぬみて迷ふる事無成る事よりて易、即ち
小繁縝辭傳より以通天下の志以定天下之業以断
天下の疑とも有之ひ言上名とハぬ何して軍との

由乃よひり言と名ふハ必皆其爻象うりてく
其爻象の成る小^ト_トおある昂ち言名の拘とす
ものあり爻象ハ取象のお合に減りて其爻と
作毛^モのあつて合して咸毛^モお左引別て參
毛^モも生來^{ナリ}伏羲^モ八卦を作り^モ一通
の卦の爲小作れるねつて文王^ハ其圖^モの浮
ムトヨモ^ト六十四名の物と寳^モて其象^モニ半罪
とすして爻^モすく^モ其道と再^モたるねうり^モ通
の入用^モも^モ寳^モ其物の學通せ^モれハ仁義道德の
徳^モと參^スする事も皆私^のはなとうり^モ其

主

説

徳として悔^モる所も皆古聖人の範矩準繩^モ合
く^トアヒ^トされハ易^モ學^ハ學者至要^の事^ト可^シ思
石^モ其詳^モる事^トむしろ^モ野志^モ著^モ立^モ易
經解^モ易^モ源^モ先^モ易^モ學^モ寳^モ小^ト古^ト後^ト上^モ由^シ尋^モ可^シ

終^モ此^モお^モの^モ一^モヤ^モ精^モ微^モ也^モ有^モ矣^モ左

而^モ論^モ面^モ命^モ可^シす^モて^モ、明^モ白^モ未^モ分^モけ^モ也^モ矣^モ

ひまと^モ存^モす^モ也^モ

十三 論語と書^モ如何^モあふ^モかゆ^モ極^モ後^モ此^モ承^モ取^モ後^モ此^モ承^モ取^モ
此^モ傳^モの字^モ第^モハ後^モ世^モ辨^モ傳^モ又^モハ革^モ傳^モと熟^モ用^モ彼^モ
ひまと^モ存^モす^モ也^モ

十三

是^モト三字^モあら

お成はれとも是ハ論の字の本義を行ふに論と
きふいお事の條理付きて度^モ^度、是うあり
前の事より又ハ其物是^モ是^モのあるあると云
を論とし孔子の所言する事の忠信^ハけのめ
くモ^ト君子の忠信ハ其のめく何る極^シと向
るの語の類と論^シ集めて總^シ人の論事次
を扱^フふそれくの論の種位と知るの役とある
「^トき焉の書より叔^ト法門人の孔子^ト向^ム不^トの孝
仁又政の類ハ即ち君子^ト論れる不^トの正義と尋
ひたるねうりと可^レ思^フ。

十三孟子とヤ書ハ内々松廟^{ぬる}が孔子の旨^ト叶^リハ
のヤを旨^ト作^ル取^ルは孟子の書と近^シ至^ル人の目小
旨^トたるすも有^クい松^ト中^者も有^クい得^トもあ
れ^ハたる^シ僻^ムよて^シ離^ハ孟子性善^ト論志原^キ
不^ト謂^フる事^ト是^ハ後^シの有^リ君^子不^ト謂^フ性^トヤ
而^ト括^ム合^セしる見^アヤ^ハ能^オ方^ヒ弟^ト孟子^ハ
ソ後^シを差^リみく^シ一通^シ性^ト是^トも^トう^シ
得^ハよりして荀子性惡^トの説^ト生^シヤ^ハ松^ト
ヨ出生^シヤ^ハ是^ハ荀子も孟子と契^リするの論と
云^フ在^リ何^ミ^シすも養氣四端擴充之論^トハモ

極はとモテキ事ヲ由度ルトウミ思乃リ

古

老莊之說ハ如何教以者かと云作ハシル所ナリ
老孟と隱者と極ニ心得ナリム得リ少て老子莊子
ともヨ皆彼ナ述くム御少て天下玉家と治シル
而亦少て書を著スモノ由度ル老孟ハ自ク
知もして乾德ナリテ事と云極ハ老孟ハ小弟
楊子^{一チヤ}の^{チヤ}ぬ^ヌと教へ名教とも用ゆム但名亦
已^ヒ々^ヒ言モ行リ卒^{ハシ}の^{ハシ}中とちりてお^{ハシ}の^{ハシ}
き^{ハシ}もと^{ハシ}とい^{ハシ}ト^{ハシ}ヤ^{ハシ}聖人の^{ハシ}引^{ハシ}合^{ハシ}セ^{ハシ}全^{ハシ}

古

坤の箇ありて乾の易^イム一^ヒ老^ヒ老子の經文と
見え^{ハシ}庄子の篇内逍遙遊と始として逍遙
遊^{ハシ}九萬里登りて^{ハシ}南^{ハシ}と圖る^{ハシ}とし^{ハシ}、
己^ヒナ^{ハシ}も^{ハシ}と^{ハシ}くして^{ハシ}は^{ハシ}下^{ハシ}に^{ハシ}改^{ハシ}と^{ハシ}、
^{ハシ}と^{ハシ}て^{ハシ}石^{ハシ}下^{ハシ}内^{ハシ}篇^{ハシ}と^{ハシ}り^{ハシ}は^{ハシ}下^{ハシ}改^{ハシ}と^{ハシ}、
^{ハシ}と^{ハシ}て^{ハシ}是^{ハシ}と^{ハシ}い^{ハシ}て^{ハシ}も^{ハシ}玉^{ハシ}の^{ハシ}徳^{ハシ}と^{ハシ}、
^{ハシ}ある^{ハシ}と^{ハシ}後^{ハシ}道^{ハシ}徳^{ハシ}と^{ハシ}の^{ハシ}家^{ハシ}と^{ハシ}專^{ハシ}と^{ハシ}養^{ハシ}生^{ハシ}の
車^{ハシ}の^{ハシ}益^{ハシ}教^{ハシ}而^{ハシ}心^{ハシ}得^{ハシ}た^{ハシ}いた^{ハシ}ある^{ハシ}心^{ハシ}得^{ハシ}達^{ハシ}
とある^{ハシ}は^{ハシ}難^{ハシ}は

古

十五 佛家の説め何^{ハシ}有^{ハシ}世^{ハシ}ニ教一段の説^{ハシ}と^{ハシ}り

志有之は極て彼が成れ全禪ニ教一致の者よりは
てやをい旨を仰作下取し神学の流を私氏より
出たる也とお見へやは佛家の說全禪の不掌ひ
ふやは私家をふやは僕の人の内僧徒も難あり
は左毎度作^ハよ取^ハ義も有之は又新氏の說を
大小家とやの差が有之全禪自說の内^ハ翻譯有
えはる難一定以上小真言宗^ハと參^ハ又大^ハとす
華嚴法華の說とも別格^ハときやうぬくに寛
竟の不^ハ可^ハの成仏と永めてやともうやうい完^ハ
生滅度と^ハは汝^ハはな是も死^ハと成仏さ

するとやうとのこやはねみて聖人のあ世の
ま民人とあんちると^ハ接するの遠^ハて聲を
立ち不^ハきんくの身^ハ接するの事とのと思ふ事
は海^ハも^ハあ^ハて一ト^ハま^ハの道と同^ハと^ハ之^ハ
無^ハ並^ハゆ^ハ妙^ハう^ハる^ハの流^ハりと可^ハ思^ハれ
十六 禪學と^ハ物^ハ用^ハ立^ハは^ハれ^ハと^ハ尋^ハ作^ハ成^ハれ
是も右^ハを^ハ通^ハ全^ハ作^ハあ^ハる^ハ用^ハ立^ハは^ハれ^ハ是
用^ハ立^ハは^ハれ^ハ詳^ハ論^ハ及^ハひく^ハく^ハは^ハれ^ハも^ハ是
も畢竟達磨の^ハめの^ハ神光^ハ安^ハ心^ハ示^ハて
よりの宗旨^ハて^ハじ^ハと定^ハし^ハる業^ハよ^ハき^ハあ^ハり

ひて下の物理底もねり因一板するよりてひゆる
米も一粒もて無春もせうあるよりく、底板も
は積けらる板うる事有く、一心と定むとは、
理是みて明くらうると、ヤマト全之道理。
山何事も皆く学ひてほよ釣る事有る事、可有
えひ情く学ひて釣る事有る事、無事有る事、
得た是に者至人の道とぞ大なる事遠有る事
と可致思及し

十七 あくす有る心の心學家とくらもの、ハめ何の事の
すひかはる事後承は是ハナニ二教一段の況ナニを

得り前條よりをひ通の事よ由産ひあ處事、
名疇の因よ亦一立山は後て立成し

十八 文章の習古もめ何いとマヤハと立後承ひて
取ひ文章の習古も先助字虚字の義とと
くも含得して其精微精微と極じまは自能小自
の神采の用よ入らず、物と成りヤハ板其便ひ
方と古書の使用の例よ考へ合せてほよ又文
理とやねと議寃殺りぬち辭句の主方或事減
す無く或事かづく感事先寸度く或ハほ
よモ無きの詫合点ありやい右の被行略出事ヤ

以得ま後文とやおと仕官するようよくい右の為
す先年書文添續書文牒と書と板刻刻中付立
ひ先よりて古誓古文牒は上幾遍も由書文牒にて
正續よりて百篇と大抵ハラ由記述する板よおねり
立支よりて辟の文章の脚あふうり可ヤレ整至より
助字と二十六より五十言まで書寫らきに板
のを取いた板よ字ひい得を自詭よま自分お無の
記魂出あやひて学文よ其え落半ハセタシ半ハセタシ半ハセタシ半ハセタシ見ミ可
やし甚シほち何よりも生事可ヤレ初學より韓文
と書ひ抑文と書ひに板やひるよも一向持もま

車よて不論文字の力あああやひるも併と覺へ
ひすも只ひもよしぬすと可き思ひは文理の事
を淇園文波と書は近うアタマに

十九 诗作の藝古の事アガひ是を文字の
力出事不ヤひて、不論平仄ハと合せ文字と切合を
證シテ合せば極まる事て、詩よみうる物うて蓋度
ひ五七絶句七律五古ハシト全篇の持合と一
小吟味ヒム成は一句ハシト全篇の持合と一
字え板全篇の持合の意味をこめて無文字の
れ於も富りるくはあう。初の内も全篇の

を味と拘中よねくくい在出来中間發は侍
多小技技にてひ得良是以能社骨とわやひる
ち成物致し事とう御忌石

二十 教と事めの極み波して之教にきうやが
アヤキリ板教傳下承は篤士の教のひことは板
波りよまで先ハツの難有も一ツよも是を學文
の教もよく済ありは而歎士學文としく教一
導きは云用の事の極何生もあひ子骨と
一難と波やレニツヨハ世禄の家是三代と難ある
内す無き生貨板の難知恩不肖有之は不行

きよー先代の親孫とそひあやは財無ニ難す
て子孫お縁致しありは歎文母くらの者のが先を
捨ぶ賢智とする事全乎を世間並に親孫
と守りゆす出来ぬち古より家縁のお縁亲
をひよーとおいてお次へ持きてる事無く
亲をひよぬれは學文法用とおは乞と二難
と波やレニツヨ無き清革の内學文と波ひ者然
くて文育成者多々くひ左學文と波ひ者然
て始々忍きて中間よ入をかやひ身大よ困り入
ひて志有く者も學文をお止やひ是も二難と

彼やひ四才は武士のまゝ生きてても民藝を
入用のおとやう世官一流の風俗トハしてやるもよし
ひ友若輩の者弓馬劍槍の稽古より深く学
文と彼やひ附身安之ひ是と曰難と彼やひ立す
は流士の學文とヤ無先生四書六經の素讀タガ
意小波ミナハをもひ波大素讀の士無是と附身
文育タガも云ひゆひ書よ深入公用と存ひてお止
させやひ其上強て彼ミナハの得タガ達解の稽古よ
て是ミナハは書タガのにあ似と彼ミナハとよて併用する
者多々ありひ其上タガの不と吟味タガレバ

志育タガの志も其師タガる人の彼ミナハ接取切りよ止
りひ友若タガ書タガ上タガ板タガの如支主傳業彼ミナハ者も傳
業の家よてそもひ友若早起勤務の法タガとお廻タガ
ひ友若タガと寛初よ見切りて止タガ者多く出産タガ
是と云難と彼ミナハは云無讀書より詩文章
と心タガあひ志風流タガあひひより起り晉人の放
達と兼タガい義と流俗タガ混タガりと爲タガて世間の
主称をのと云ふ者有タガ人の耽タガる者、耽タガ
の右タガと云ふ事と恐き中タガて學文彼ミナハせ
かやひ是と云難と彼ミナハもて育タガの得タガとも

先生おと病因と汝の事に古座に右て病因の南
りは某う一々死刹に入ふやひてハ而論学文ハ雖出
來ひ故教仰もミヤ冒發と云ひ事ト古座
古一前書より至る學教雜註八難の事も又追て古
考も云古教思古より古座より就右謹新と教説古
アリてハ故何極廣義と以て教と被しの如ハ古
尋死仰誠はる所ハ謹新を廢ししてハ無シ
學文と被させハ金術の如ミ早急人道も云
よりて君子の道をかりありありの決斷是非
善惡を別ちひ不備私の思ひるく云々の道

理と矣つたうも時宜よ叶ひは極ふれ歎ひも是と
學文の廣範と被は事よりて古の如つ至り事ハ書と
讀古聖人の道義と極めかやひて聖師法あくひ
て難列刻合は左より書と讀より勢事より古座に早急
シ而書と讀事ナニシハラモビ妙ニユマサ事ヒテ
玄よりてお源種の事よりて古座に於又比ハの事
とたゞつとれてヤハ得ち學文よりて古
の而つあらんとする事野菜粗食よりて貴賓と
饗食無常んと云うめくよりて而論也ヨリてハ
出来ふやひ左聖賢の讀書と引付て文義次

所は先やうは是ハ山海の殊味を求め集じう如
其文義と參同て元と無しふて元と審ふする
無庵割してふ條味允と調和和し養院とあるうめさ
ぬより備考條允と右の思惠傳程の立いふる誠る
う即貴客と御食應うきよめをぬよは座ひ傳承
切うて琳誠りんせいよ及はうきよハ料理とさせふくし御食
應努すして棄子きよの教うり御衣の御食應の為
みするうりとめうふ知り努はる料理とさせは得
ち目高めぐらくて料理とする事より精とせ
うやうは其目高めぐらと教うせとして學ぶ文而已むづかずと先

ナムヨリ五教引されふやうけ不拂老ふり一は度たま
と存しゆ

廿三 前書よりをは士と減りふハ如何の事こととして減
てヤが其役とやをは私社役職わざにて取はば食
法とやも有くい礼記文王世子し之篇よ凡祭まつり
養老乞言合禮之礼皆小樂正詔のり之於東序ひがしと有く
又凡語于郊者必取貲歛うへん才焉或以德進或以事舉
或以言揚曲藝皆極言之以待又語三而一有焉乃進其
等以其席謂之郊人遠之於おほ成均なり乃取爵於上尊也
と有くい止よハ其食法とや付はるハ小樂こくに職

の者其日限とは其試みて会語とさす所を人數
とよせてやせん事よりさて郊の学よりて
会語うへるより是非より其語よりて買ひたる者と
とり方行ると致りて引何事とやせるよりも
る事うれう其語のふゆ或多徳の事よりゆ
うあると以てをや努るも何事或ハ事の会報
くく伏よくモ魚と以て奉酒を行り或ハ言
語の云トいうこのよきと以て抑るも何事て遷アシ
トの教の曲義アシすてもば会語の成行る事より何
きも皆も成り玉之湯の黙アシ防ト遠礼行アシす一紀

根子と誓ひせて又傍ると侍しめて叔又以弟の
娘今と々一應山にて見るに左の二科の肉そつ
までも何くる事有は其位ホトとを以る事を次
第と以てして是とは郊人と名付け玉学アシ
入きて天子の為小爵ホトと上尊アシ取の事と御せ
ししる事アシ申アシ試るの法大略是の法をも
ての立アシ河の處アシ事アシ事アシ度アシ何乞
ふても唯会語よりて取上アシの法行アシは學文アシ
能精アシと入アシ其用アシ立アシ根アシする事ある
き事アシ是又心乾アシの勢アシとみる事由體アシ

古三

学校の設よハめ行役てて給ひとお役トはる所
は承り先年他不よりも尋矣トは事有之
て返言ヤをひ歸其写入は後ヤは先達の所
は士風を直し給毫下に乃致取扱ひ委大略の旨
を古文書皮旨を承り全件謹以某学校法
矣ヤは先固孔つよて丸扱り学校、士風と改め
玉俗と西夏政の設よは变違以本選舉の
法土とお送ヤ在某学校の用いうことのく備
者中麻範いとし仕法とあり孔子を城法亨
の変と變改ての語孟子謹庫序之教申之

以孝悌之義とくの飯と參振合たるお送役
ナリ 独邦寛文以事徳方より学校と役らき
西シテくはるとも大卒士風の為よりアヤ
徳志又多侍文の士と生ノヤ 教育にて是れ
是ハ早起西土秦漢以来邦郡縣の飯として学者
と門第はひとと陸の代より文士と士及第と
と互の郡縣の官人より役を一い為の務より
きねよ役一たる学校の仕法の立つて
本邦只今対走の治めうるる徳侯の玉の

治の為よりは廃りあやひ思立にて先士風と
西一かずして多額の農工高決して俗と改め
ナ百姓の是が小民之上と見做ひやもすてひ
左士の性根と商人目高の如く役業にて、まの士
子成りあやひ左様にて、教誨道の庵道にて、若妻の士
と教へ仕法ハ恭慎忠信の道理の心得方とは
マヤ吹せんよ書写させて後日其通りと
宿よりさる事に由度は是ハ玉君世子中大
縁し家男子おハ急度せ通りとお勅あやひ
て、出来乍ら發ひ叔其宿より迷ひ承の通達

ふ通達の不とお試み通達の士ハ序とを免
うやいぬ世よ絶ひゆち自然と讀書多發し
ナシ、而しこれよりうやひ叔大抵通達と上
よりて考情の道理と以て種々節向と設す其
度通の仰と試み仰出申い士も即先有用
之河とよりやたる事よりも遷舉う有之
又是法と云中邑問も時々大抵咸能役
士とを一議一策せつやひ農工の内よりも記述
出来御き付ひその多引舉うやひ是多士
大丈の家の嫡子次男お子扇と付ければ考す

己の本在甚は心済ふは五般一かゝを以て事うれし
叔ナ叔ナ彼は得も大勢の取扱にてはよ凜そ
の無自能の宣行と將もつやひ上よりの選舉
の法不後日より言ひお祓いはあとは引奉
て多叔ナヒリ士風玉俗自方お改りに道理
由度は先因治教の御忌め無もおよて後世
の学法一人く面々よ磨すり出しひ仕法も仍末
よ其心術う害よ成ひて用ひ立たてやハ叔右の教
育も附支まつ多よ及よアヤハヒ度たど御志名疇と
ヤ書被刊出はいおなな書しといく由老おじアキラ

自然よ其用ひうお命いき可ゆひ大略だいろく通つう
由度は精安事ひ而上うへううてハ難むずヒ
叔ナ書付しょふと以ては考かナ加くわヒくわおよきうやハ
叔守おとし一教いつきょうと設たてらきらきひよと多おほ公済くみ
事事由度は序じょ中なか書し經君きみ喪ま之の篇へん于殷おん
札札配はい天てん多おほ歷れき年ねん所しょ天てん惟い純じゅん佑佑命めい
姓せい王おう人じん國こく不ふ東とう德とく明めい恤あ小こ臣しん屍し侯こう甸てん矧し咸かん奄えん
走はし惟い茲しづ惟い德とく稱めい用よう又また厥くる辭こと故ゆゑ人じん有あ爭さう于四方よんぽう
若よト筮し罔ま不ふ受う孚ふと何なり端は無む殷おんの礼れい制せい
り改かへててて予よ配はいする者もの多く多くと應こたるる

左より天のゆも是時トありてハ殷の其玉命ミタマノミコトと保
てる所と信スルて渡他のカシマ高タカの其世ミタマ
無ナシ実ヒツ其百姓大族ミツシキの宦ミタマする者及ヒテ王
の家人ミツシキ皆ミツシキ恩義ミツシキと秉ミツシキりて王ミタマ憂恤ミツシキも庵
き不ミツシキとレバめリ御ミツシキうふミツシキ事ミツシキあリ百姓ミツシキ未全ミツシキ
めリ御ミツシキはリ制ミツシキや小臣ミツシキ蘿屨ミツシキ侯甸ミツシキのをく王
子ミツシキ猶ミツシキすリ人ミツシキひきくミツシキ幸ミツシキ走ミツシキして其礼ミツシキの制ミツシキ
る所ミツシキあくリしてリ牲ミツシキ礼ミツシキを勅ミツシキしリの禮ミツシキと称ミツシキ
して名ミツシキ是ミツシキと以リて殷ミツシキの碑王ミツシキと又ミツシキせんと欲ミツシキせ
左より下ミツシキ固德ミツシキよりて上下ミツシキの心ミツシキ符ミツシキを合ミツシキせリる

育ミツシキりたミツシキと立ミツシキあリ事ミツシキあり是ミツシキよりて見ミツシキ
于殷ミツシキの时ト小民ミツシキと立ミツシキあリ面ミツシキよ德ミツシキと情ミツシキ
て上ミツシキの人ミツシキとはこうミツシキと以リて每ミツシキ一ミツシキ月ミツシキよく努
んと心ミツシキ識ミツシキと見ミツシキえリは是ミツシキ、尚書ミツシキの酒諾ミツシキ
の篇ミツシキも其領ミツシキの事ミツシキお見ミツシキへいリめリ文長ミツシキさリ
よ省ミツシキ暗ミツシキ役ミツシキの事ミツシキお見ミツシキへいリめリ文長ミツシキさリ
くより教ミツシキへ學ミツシキさせリる不ミツシキもるミツシキ積ミツシキりて
小民ミツシキも道徳ミツシキよばリすリ、こリうミツシキの任ミツシキの事ミツシキ
の核ミツシキよ思ミツシキひへく有ミツシキうリ上ミツシキへと今ミツシキの已ミツシキ
人ミツシキト民ミツシキとはめリよ行ミツシキひトらミツシキひく玉道ミツシキと

伸る事も事も一ト民を皆も思ふるも
との心思ひ直道なりて威權威權として神神
てねと云可せぬ仕方うる所ト云ふ志一人も
を立てぬふ志こそものにもするしは事も
若よゝる人の才一の心ねありされが教説
施さすの世話と云や死を取れりも必シ民を
思ふる所は教説ると中極ある所ひし
有くる處は只うそ因よりて居る所の處
不とは世後詰とやきてゆひ碑をありとマ
思ひは左様すと云ふて、家初自うと其事と

棄て民心小内よ省升て若と來しる事か
くして恩蒙すと恩成すとは作す若の
事ありと云ふよ心ねと所詰付て若ふを
ミ道よ済ふりをりるまゝ一き事とて教
い當は変其大事大の心ねと云ふは左序
ナキハ能くは勤矣古氣中う死取れり

其國皆因之以成其事

是故曰此其所以為大也。蓋非以爲能也。故曰
德者，人之所以成其事也。是以能成其事者，
必有其德。故曰：「能成其事者，必有其德。」



